

やかな配慮は、毒ギョーザや盗作などによって形成されたステレオタイプに亀裂を生じさせる別の中国の顔を見せてくれる。中国企業による企業買収の方法を分析することで、もう一つの中国像を探してみてもどうだろうか。

(2) 米中関係

4月5日付けの“Yuan revaluation draws fire”によると、米中が対立する具体的な問題として、オバマ大統領とグライ・ラマの会談、台湾への武器販売、グーグル撤退のあと、元の切り上げが再び注目されているとのことである。4月12日付けの“China, U.S. tussle over currency”も、通貨である元がヴェトナムで定着しつつあるというエピソードをとおして、世界経済における元の影響力の増大に対してアメリカが神経質になっていると説明している。その一方、4月19日付けの“Beijing may be ready to let yuan strengthen”では、核セキュリティサミットでオバマ大統領が胡主席に軽く頭を下げて握手をしている写真が掲載され、中国の通貨政策が紹介されている。

9.11 とリーマンショックを経て超大国アメリカの威信が揺らぐ一方で、北京オリンピックと上海万博を足掛かりとして経済発展する中国を目の当たりにして、世界第2位の経済大国日本は米中双方の様子をうかがいながらの国家運営を迫られている。この課題においては、中国からみたアメリカ、アメリカからみた中国、両方の視点が必要です必要なだろう。したがって、中国研究をしている学生にはぜひとも英語に磨きをかけ、アメリカの状況にも目を向けてもらいたい。

(3) 中国、台湾のポップカルチャーと日本文化

3月8日付けの“China wants to be major movie power”によると、中国の政府と映画製作会社は自国で制作された作品の販売拡大に働きかけており、日本の配給会社や観客の関心を引き付けた例として『レッド クリフ』が取り上げられている。その一方、4月5日付けの“Japanophiles thriving in Taiwan”は、台湾の若者たちがマンガやゲームをとおして日本の歌舞伎に興味を抱いていると伝えている。

The Nikkei Weekly の一つの特長は、経済ニュー

スを読みながら、文化的教養も身に付く点である。中国文化と接触することで日本文化がどのような影響を受けるのか。日本の伝統文化は台湾社会においていかに変化していくのか。こうした点を身近なポップカルチャーをとおして考えてみるのもよいだろう。

おわりに

1ヶ月間の記事を見るだけでも、英語で中国関連の有益な情報を入手できることがわかってもらえたはずである。世界はすでに上海万博以後のグローバル社会を想像/創造しようとしている。未来の構築はいま現在をどう読むかにかかっている。クオリティの高い情報媒体を活用して、日本の地域性を意識したグローバル社会の形成にぜひ参画してもらいたい。

学習者の知識構造と語彙習得

語学教育研究室
古荘 智子

1. はじめに

外国語学習において目標言語の語彙力が重要な要素の一つであることは、多くの研究者によって論じられている。しかし、語彙の習得法に関する研究者の見解はさまざまである。本小論は、まず英語学習者に求められている語彙力の指標を簡単に紹介し、次に語彙習得と知識構造についてまとめる。

2. TOEIC スコアによる英語力の指標

文部科学省は2003年3月、「英語を使える日本人の為の戦略構想」を掲げ、英語力の指標をTOEICのスコアで具体的に示唆している。それ

によると、日本人大学生に求められている英語力の指標は TOEIC スコア500点、企業が新入社員に求める英語力の指標も TOEIC スコア500点と示されている。周知のように TOEIC は英語を母国語としない学習者が、英語圏で日常生活をする際にどの程度のコミュニケーション能力があるか、を測る為の試験であり、特殊語彙や専門知識などを測るための試験ではない。したがって、TOEIC の中で使用されている語彙は日常的な会話や文章の中で使用される語彙に限定される。中條と Genung (2005) は、対象となる英文テキストの95%の語彙を網羅するのに必要な数の単語を BNC (British National Corpus) 高頻度語リストの上位から数えることで語彙水準を測定した。その結果、TOEIC は3,714語の語彙水準であることを指摘している。

3. 英語の語彙力とは

英語の語彙力を語彙サイズから論じた研究としてよく知られているのは、Nation や Shumitt らである。Nation は、自律的学習者が必要とする最低限の語彙力について、口語的話し言葉に関する研究の中で約2,000語の語彙が95%以上のカバー率を提供できる (2001/2005, p.130) と述べている。また、代表的な上級学習者用辞書 (例えば Oxford Advanced Learner Dictionary, Longman Dictionary Of Contemporary English など) は、定義用語彙 (見出し語を定義するために用いる語彙) を約2,000語に制限していることから、自律的学習者が必要とする最低限の語彙力は2,000語であると考えられる。

語彙力には知識として有している単語の数という量的問題だけでなく、一つひとつの単語をいかに正しく認識しているかという質の問題も含まれている。Gass & Selinker (2008) は、語彙力の量と質の問題を、幅 (breadth) と深さ (depth) という用語で表現している。語彙の深さとは、単なる一つひとつの単語の意味の知識にとどまらずに、他の単語との意味的な関係をも含むものと考えられている。Read (2004) は、この語彙の知識の深さの定義についてさまざまな考察を繰り返しているが、そのなかでは、意味の正確さや、包括的な単語の知識、そして他の単語との意味的な

関係を含むネットワークの知識についても言及されている。

4. 概念のネットワーク

Collins, A. M., & Loftus, E. F. (1975) は、知識構造を活性化拡散モデルによって示した。Collins & Loftus によると、意味的に関係のある「記憶項目」は相互にリンクで結ばれており、ある項目が活性化されると、結びつきの強さに応じて、他の項目も活性化されることにより、さまざまな文脈の中で起きる事柄を効率よく処理することができる、と説明している。知識としての語彙は個人によって異なっているため、人間一人ひとりが持っている概念のネットワークも異なっている。Aitchison (1987) は、「bird」ということばを使って、鳥のプロトタイプから周辺への広がりを図で示し、それによるとアメリカ人にとって最も「鳥」らしい鳥は「こまどり」であると示されている。しかし、日本で生まれ育った我々には「こまどり」は「鳥」ということばから真っ先に連想されるほど、馴染みがある鳥とは言えない。むしろ、「すずめ」、「鳩」、「つばめ」などの方がはるかに連想されやすい鳥だといえよう。このことは、アメリカ人と日本人の生活環境や文化的背景の違いによって、特定のことばから強く連想されるイメージが異なることを示しているといえる。

5. 言語連想法

知識構造を知る方法の一つとして、言語連想がある。言語連想とは、ある単語を刺激語として提示し、その単語から想起されたことばを書き出す方法で、心理学研究においては、従来から知識の実態を調査するひとつの方法論として用いられてきた。古荘 (2009) は、英語の語彙を対象に、特定の対象群の知識がどのようなもので構成されているのかを明らかにする1つの試みとして、ITを専門に学ぶ情報科学部の学生および院生 (IT群, 220名) と、情報科学系以外の学部生 (統制群, 184名) を対象に、言語連想を用いた調査を試みた。

『最新パソコン・IT用語辞典』(2009)によると、ITで使用されている語彙数は7,000語とも8,000語ともいわれている。その中で、英語の語

彙とスペルが同じ語彙（英語語彙をそのまま IT 用の特殊語彙として使用している）の数を調査した結果、およそ 3,000 語になり、それらの語彙を頻度レベル別に分類を行った結果、約半数が高頻度語に属することがわかった。これらの語彙は英語本来の語意とは全く異なった語意で使われているもの（Opera, cookie, bug など）と、元の語意を知っていれば IT 用語としての意味の推測が可能であるもの（board, surfing, memory など）がある。それらの語彙を英語語彙より先に IT 用語として認識し、ひとまとまりの語彙に関する知識構造を構築した場合、英語語彙における知識構造とは全く異なったものになりうると推測でき、それが英語を学習する際にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることにより、学習者の知識構造を使って、新しい英語教授法を開発することが可能である。調査方法の詳細はここでは省略するが、分析の結果から IT 群は統制群に比べ、IT 関連以外の一般的な連想の反応が少ないことが示された。また、統制群の連想の方向は、IT 関連だけではなく、それ以外の方向へと拡散していく傾向が明らかになり、一方で、IT 群の連想の方向は、IT 関連用語に絞られ、拡散が抑制される傾向が示された。言い換えると、IT 群の学生は、英語の学習中に、IT 用語として非常に馴染み深い単語に遭遇した場合、英語の学習が抑制されてしまう可能性が示唆されるとともに、IT 用語として知識がある既知語を利用した英語教授法の可能性が提案された。

6. むすび

このように概念のネットワークの考え方を言語習得の教育現場に応用してみると、単に対象言語の語彙量の問題だけではなく、学習者が既に保持している知識の偏りや、認知の問題をも含んでいると考えられる。新しい情報を学習するということは、学習者がすでにもっている知識にそれらの情報を付け加えることに他ならない。そして、そのような学習が効率的に、かつ正確になされるためには、新しい情報をどのようなことに関連づけて、教育現場で提示するかが重要な鍵となる。英語語彙の習得を、学習者の専門科目や興味関心のある別の知識体系と全く切り離して考えるのでは

なく、日頃から馴染みがあり、深い知識と豊富な語彙によって広がる既存の語彙ネットワークをうまく利用することによって、英語のためだけの語彙習得という枠を超えた包括的で、学習者にとって本当に必要かつ使える英語力を、より効果的に効率よく身につけていくことができよう。

引用文献

- Aitchison, J. (1987). *Words in the Mind*. Oxford: Blackwell Publishing.
- 中條清美、Genung, M. (2005). 『British National Corpus を活用した TOEIC テストの分析 語彙活用水準の定量化と特徴単語の抽出』 TOEIC research report, No.3. The Institute for International Business Communication.
- Collins, A.M., & Loftus, E.F. (1975). A spreading-activation theory of semantic processing. *Psychological Review*, 82, 407-428.
- 古荘智子. (2009). IT 用語の知識が英語の学習に及ぼす影響. 『言語文化研究』, 16, 1-15.
- Gass, S. M., & Selinker, La. (2008). *Second Language Acquisition: An introductory course*. (3rd ed.). New York: Taylor & Francis Routledge.
- (財)国際コミュニケーション協会. (2007). 『TOEIC テスト活用実態報告2007年度版』. <http://www.toeic.or.jp>
- ネーション, I.S.P. (2005). 『英語教師の為のポキャブラリーラーニング』 (吉田晴世、三根浩訳) 東京: 松柏社.
- Nation, I.S.P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 大島邦夫、堀本勝久. (2009). 『最新パソコン・IT 用語辞典』. 東京: 技術評論社.
- Read, J. (2004). Plumbing the depths: how should the construct of vocabulary knowledge be defined? In P. Bogaards and B. Laufer (Eds.), *Vocabulary in a Second Language*, 209-227. Amsterdam: John Benjamins.